

論文の内容の要旨

論文題目 十八世紀日本の漢詩文と経世 — 正徳～寛政期の幕府儒臣を中心に

氏名 山本 嘉孝

本論文は、十八世紀すなわち近世中期の日本における漢詩文制作の展開について、幕府に仕官した儒者による漢詩文・著述を中心に、考察した論考である。十八世紀に注目したのは、江戸時代中期を取り上げることによって、初期・後期にも目配りする必要が生じ、江戸時代全体に関する見通しの獲得が期待されたためである。

江戸時代の漢詩文制作を取り上げた先行研究では、研究の対象が、十八世紀後半から十九世紀前半にかけての民間における漢詩制作の流行、及び反朱子学を掲げた荻生徂徠の一門による漢詩文制作に偏っている。本論文では、その偏向を少しでも是正すべく、近世日本における漢詩文制作の根幹を担ったのが、一般の武士や町人ではなく、幕府・諸藩に仕え、経世済民を本領とした儒臣たちであった、との視座に基づき、特に、十八世紀前半に幕府・諸藩に仕えた儒臣を多く輩出した木下順庵門下（木門）に焦点を当てた。同時に、木門同様、徂徠一門に対して批判的であった、十八世紀中盤から十九世紀前半にかけて著述を遺した儒者たちやその周辺を取り上げ、近世中期日本における漢詩文や儒学の隆盛に、徂徠門以外の人物たちが、具体的にどのように関与したかを検証した。

本論文は三部構成で、序論・結語を含めて合計十三章から成る。序論では、近世日本における「経世」の意味、また儒者の職分や営為について述べ、「儒臣」の語、及び「十八世紀」を時代区分と見做すことの意義について論じた。

第一部では、木門出身の儒臣の内、室鳩巢と新井白石の擬古的作詩を分析し、擬古的作詩と経世の関連を考察した。第一章では、室鳩巢「和陶詩」における六朝詩の模倣と宋詩の撰取を検討した。第二章では、室鳩巢「和陶詩」中の「擬古五首」を分析し、擬古詩における寓意表現とその政治性について論じた。第三章では、室鳩巢の辺塞詩を対象に、楽府題詩と擬古・寓意・詠史・時事の関連を考察した。第四章では、正徳三年中秋の白石と鳩巢による詩の応酬を分析し、主君を失った白石が屈原や李白になぞらえられた様相を分析し、白石・鳩巢にとって、擬古的作詩は、儒臣の生き方の指針を提供したと結論づけた。

第二部では、宝暦～寛政期の幕臣教育における漢詩文と和歌の役割を検討した。第五章では、鳩巢門人で幕府儒臣の中村蘭林が、朱子学の修得と漢代以前の古書の読書を両立した過程を考察した。第六章では、蘭林による学問吟味の素案を分析し、和歌吟詠による平安朝の文物・治世の思慕が、幕臣教育に有益とされたことを明らかにした。第七章では、蘭林門人で幕府儒臣の柴野栗山による学問吟味の構想と実施を検討し、同時代の朝廷と在野からの刺戟によって、漢籍（経書・史書）の読解と漢文作文技能の獲得、すなわち漢文の読み書きに重点を置いた朱子学の修得が、幕臣の修めるべき学問とされた経緯を追った。

第三部では、民間における諸芸の流行を、主に経世との関連で論じた。第八章では、木門の祇園南海の竹枝詞「江南歌」を分析し、明代古文辞説の受容により、擬古的作詩が為政者の側を離れ、「俗」や「民間」に「真詩」を見出す思潮が生じたことを論じた。第九章では、天明期の榎田北岸による插花論を取り上げ、古文辞詩批判と袁宏道受容が、同時代日本における諸芸の世俗的な流行と関連したことを明らかにした。第十章では、経世家を自任した儒者、山本北山が、民間における諸芸の流行に、経世家の視点から如何に介入せんとしたかを検討した。第十一章では、幕末の幕臣、林鶴梁による唐宋古文の学習と漢文作文に、民間で流行した諸芸が如何に影響したかを検討した。結語では、十八世紀日本における「擬古」の多様な形態や変遷を論じ、近世日本漢詩文の展開を「朝野」の関係性によって把握することを提言した。

本論文全体で明らかになったのは、近世中・後期の日本における漢詩文の展開を貫く、《擬古》（先行作品の語句の模倣）から《反擬古》（語句の模倣への反発）へ、という漢詩文制作上の様式の変化が、幕府・諸藩に仕え、経世の場に近侍した儒臣たちの営為や立場、ならびに民間における諸芸流行という現象によって説明される、という点である。具体的には次の通りである。

十七世紀すなわち近世初期、徳川家に仕えた儒臣の家である林家の儒者たちが、まず擬古的な漢詩文を作った。その模倣の対象は平安朝日本の漢詩文であり、武家でありながら文治を進めつつあった徳川家による治世と文教を、平安朝の朝廷の優れた文物・制度になぞらえ、平安朝の治世の再来として寿ぐ目的があった。ところが十八世紀初頭になると、林家の儒者と競合する形で、木門の儒者が將軍の寵愛を受け、儒臣として登用されるようになった。新井白石や室鳩巢など、木門の儒者たちは、林家の漢詩文に見られるような和習を避けるべく、海外（特に朝鮮）に対しても恥ずかしくない体裁と水準をそなえた漢詩文を作るようになり、

詩は六朝詩・盛唐詩の模擬を徹底し、文は唐宋古文を模範として制作した。本論文では、木門におけるこの漢詩文制作法の淵源が、『朱子語類』の記述に求められる可能性を指摘した。

林家が平安朝日本を模擬・思慕の対象としたのに対し、木門の儒者は六朝詩・盛唐詩における古代中国の思慕に倣うことで、徳川幕府による治世を古代中国の聖人による治世になぞらえ、自身の主君である将軍・藩主を古代中国の優れた為政者の再来と見做し、その治世を寿いだ。更に、自身を古代中国の文臣になぞらえることで、儒臣としての矜持を養い、六朝・唐の詩人と同じく、古人の語句・定型表現・事績に仮託して、自身の実感や現在の関心事を婉曲にほのめかしながら詠み込む、寓意的な作詩を行った。

よって林家・木門における擬古は、儒臣としての立場から取り組まれ、経世と深く関連する政治的な文芸であった。しかし、木門の祇園南海から、作詩を道德・歴史など経世・儒学に関連する文脈から切り離し、道義的ではない、純粋な性情の表現を追究する擬古的作詩の流れが生じた。南海が、順庵や鳩巢などが積極的に摂取した宋代の詩論を否定し、明代の詩・詩論に傾倒した結果と考えられる。徂徠やその門人の服部南郭なども、南海に似て、明代の詩・詩論の摂取によって擬古的作詩を道德・歴史から切り離し、更には、おそらく木門や古義堂に対抗意識を持ちながら在野での勢力拡大を目論み、享保期以降、詩集・詩学書の出版や門人獲得を通して、擬古的作詩を誰もが取り組むことのできる世俗的な技芸として仕立て直し、民間に広く流行させた。

十八世紀半ばの宝暦前後、幕府内部で儒学が軽視されていることを問題視した幕府儒臣の中村蘭林は、幕臣対象の学問吟味を企図した。その際、古人の和歌の吟詠を勧めたが、これは木門の擬古的作詩の発展形といえる。しかし、擬古的作詩という営為そのものは、十八世紀中盤以降は、専ら民間の世俗的な技芸に変容しており、素人の間で流行するにつれ、模倣される定型の硬直化と形骸化が進み、経世に当たる者の述志のための媒体としてはもはや機能しなくなり、字句の誤謬も顕在化した。柴野栗山も、寛政期に学問吟味を実施する際、作詩を経世に携わる幕臣には不要な技能と見做した。その代わりに、栗山をはじめとする寛政期の幕府儒臣たちは、幕臣に相応しい教育方法として、唐宋古文を手本とした漢文作文を行い、経書・史書を自力で読解する力を養う、という室鳩巢や中村蘭林などが実践ないし奨励した朱子学の修得方法を採用し、実施した。

それとほぼ時を同じくして、民間の技芸として流行し水準が低下した漢詩制作を引き締めんとする動きが生じた。大聖寺藩医の榎田北岸は、定型が硬直化し、世俗化・商業化した当世日本の花道・茶道に擬古的作詩をなぞらえて批判し、禅と袁宏道の詩・插花論を指標に、作詩や插花を本来の脱俗の境地に引き戻そうとした。秋田藩主の侍読を務めつつ、在野で私塾を経営した山本北山は、経世家の立場から、作詩を含む諸芸の流行を人民の風俗の問題として位置づけ、精緻な技術の追究を説いた。技巧の超越と技術の向上は、十八世紀後半における語句の模倣に否定的な漢詩文制作方法の両輪をなし、幕臣の漢文作文にも影響を及ぼした。寛政期、幕臣対象の学問吟味で漢文作文が出題されるようになった際は、柴野栗山ら幕府儒臣によって、上方の在野で行われていた漢文作文練習が幕臣教育に取り込まれ、技術

の向上が企図された。他方、近世後期の昌平黌教官や幕臣による漢文作文においては、形式よりも「気」を学ぶ方法が、同時代日本の民間で流行した書画や作詩の影響を受けて広がったと考えられ、技巧の超越が希求された。

以上の考察を通して、(1) 盛唐詩の模倣と唐宋古文の学習という、近世日本漢詩文の根幹をなす制作方法は、『朱子語類』に載る内容であり、十七世紀末から十八世紀初頭にかけて、林家との差別化を図ろうとした木門の幕府儒臣たちによって実践されることにより確立されたこと、(2) 徂徠一門によって経世とは直結しない技芸として民間に流行させられた盛唐詩の模倣は、本来、十八世紀初頭の木門においては、経世と深く関連する政治的な営為であり、更には、十七世紀の林家による平安朝の朝廷文化の模倣・思慕に淵源があったこと、(3) 模倣に対する攻撃は、主として民間における流行を経て低俗化した模倣に対して発せられたのであり、模倣に対する哲学的な懐疑ではなかったこと、など先行研究では指摘されていなかった事項が明らかとなった。

あわせて、(1) 擬古の本質は、古に仮託して今の関心事を述べる、という寓意表現に見出されるのであり、十八世紀日本では非常に多様な形で表出したこと、(2) 科擧の無い近世日本における儒学や漢詩文の展開の仕方には、仕官先と在野での活路をめぐる儒者同士の競合意識が作用していたこと、といった、今後の日本近世漢文学・思想史研究の方向性を左右し得る普遍的な論点も浮かび上がってきた。